

S. Iwamoto, '76.

神学と人文 第16集 1976年12月発行抜刷

主の晩餐におけるキリストの現在 (Ⅱ)

—今日のエキュメニカルな神学的対話への

ジョン・ウェスレーの貢献をめぐって—

岩 本 助 成

主の晩餐におけるキリストの現在

—今日のエキュメニカルな神学的対話への

ジョン・ウェスレーの貢献をめぐって—

岩本助成

- I 序
- II 主の晩餐におけるキリストの現在
 - 今日のエキュメニカルな神学的対話から— (以上、前集)
- III ウェスレーの聖餐論
 - (1) その歴史的、神学的背景について
 - (2) 「ウェスレーの聖餐論」概観
 - (3) 特に「キリストの現在」をめぐって
- IV 結論 (以上、本集)

III ウェスレーの聖餐論⁽¹⁾

筆者は前稿において、ウェスレーにおける福音的信仰覚醒運動 (the Evangelical Revival) と「聖礼典 (殊に、聖餐) 覚醒運動」 (the Sacramental Revival) との関連に触れた。勿論この点は筆者のみが指摘している所ではない。古くは、ラッテンベリー (J. Ernest Rattenbury) が以下のように述べている。「メソジスト運動は、単に門外漢への伝道の訴えだけであったのではなく、国教会内での靈的实践、特に礼典実践の覚醒運動でもあった。ウェスレー兄弟は、熱烈な伝道精神に徹しながらも、決して礼典主義者であることを止めなかった。礼典と福音とは対立関係にあるとする一般の偏見ほど誤っているものはない。ウェスレー兄弟にとって、聖餐は信仰覚醒の力の源泉であり、信仰のみによって義とされると説く者のうちに、個人主義的放縦に陥る者がいないかを点検するのに不可欠でもある。ウェスレーの運動が研究されればされる程、その見事な調和を賞賛せざるを得なくなる」。⁽²⁾ 最近の研究者の多くもこの点を指摘している。ラ

ップ (E. Gordon Rupp),⁽³⁾ ベーカー (Frank Baker),⁽⁴⁾ ディヴィーズ (Horton Davies),⁽⁵⁾ ボーゲン (Ole E. Borgen),⁽⁶⁾ ジョージ (A. Raymond George),⁽⁷⁾ サンダーズ (Paul S. Sanders),⁽⁸⁾ らの考察に注目したい。例えば、サンダーズは次のように論じる。「ウェスレーの信仰覚醒運動が、先ず第一に礼典覚醒のプログラムであったのではないことは確実である。それは第18世紀英国の滅び行く群衆の心と精神と身体と生活のための、軍事的キャンペーンともいうべきものであった。この信仰覚醒運動が、聖餐尊重の靈的生活の覚醒となったことも、勿論、真実そのものである」。⁽⁹⁾ では一体、信仰覚醒運動と礼典覚醒運動との間には、どのような形での密接不離の関係があったのであろうか。もし後者が前者から単に派生したものではなく、相互に内包し合っていたものであるとすれば、その事実はウェスレーの生涯と神学において、どのように実証されるのであろうか。我々は先ずウェスレーの聖餐論の歴史的、神学的背景を解明することからその作業を始めて行きたい。

(1) その歴史的、神学的背景について

この点についての研究は、パリス (John R. Parris)⁽¹⁰⁾ やバウマー (John C. Bowmer)⁽¹¹⁾ にその例を見るように、第17世紀及び第18世紀の英国国教会の状況、ソサエティ活動、非国教徒の状況を概観している。周知の如く、ウェスレーは国教会への愛に燃え、母教会の忠実な子として生きることを努めた。国教会の教理や伝統、殊に「祈禱書」に対する忠実さは、その自由闊達な発言や意見の変化にも拘らず、終生、変ることなく一貫したと言わざるを得ない。英国宗教改革者たちは、大陸の改革者の影響を受けつつも、ローマ・カトリックとプロテスタントとキリスト教人文主義のそれぞれの強調点を調和し、緊張関係を内包しながら中道を行こうとする伝統の基礎を築いたとされている。ボーゲンなどはウェスレーに対する克蘭マー (Thomas Cranmer) の影響を考え、パリスなどはフッカー (R. Hooker) の影響を見る。この点に関しては、稿を改め、上記の二人のみならず高教会アルミニアンイズムやカロライン神学者の聖餐論とウェス

レーのそれとの綿密な比較研究を試みたい。

これらとの関連において注目すべきものに、岸田紀による一連の論文がある。⁽¹²⁾ 岸田は少なくとも初期のウェスレーは、「完全なアルミニアンズの世紀」に生きた、アルミニアンズのロード (W. Laud) 派高教会主義の系譜に立つ者であると位置づける。両者の接点の第一は、「熱烈な高教会アルミニアンズ」であった両親である。接点の第二は、ウェスレーが前後約13年間もその精神形成期を送ったオックスフォード大学である。当時の同大学は、ロード派の高教会主義神学、教父学の研究、カロライン神学者の伝統が息づく学府であった。岸田が正しく指摘したウェスレーの形成期におけるこれらの影響は、決して過小評価されてはならないものであろう。

Sacramentarian と綽名されたホーリー・クラブ時代は又、彼が後、50歳年を経て再版する時にも「改変の要なし」とした説教 “The Duty of Constant Communion” (規則正しく聖餐に与る義務) の温床でもあった。この時代に友人を介して知ったものに臣従拒誓者 (Nonjurors) の聖餐論がある。ウェスレーはその後この影響を離れるが、両者の関係は今後の解明を待たねばならない程、微妙なものを持続しているようである。

ジョージアへの航海中、彼とその一行は毎日、聖餐を守り、船客のためにも週一度それを執行した。彼の読書リスト中、最も重要な書物は、ブレヴィント (D. Brevint) のものであったと言われている。書名は不明で推測の域を出ないが、The Christian Sacrament and Sacrifice (ウェスレーが後に Hymns on the Lord's Supper の序文として再録出版した) 又は、Missale Romanum ではなかったかとされている。ジョージア時代の行動は、教皇派として攻撃される程の厳格なものであったが、彼には国教会の伝統及び古代教会の伝統への忠実さがあっただけである。

ウェスレーの聖餐論形成には、このほかにもモラヴィア派との接触、フエター・レイン・ソサエティの「静寂主義」による聖餐否定との対立といった重要な契機が存在する。更に重要な問題は、1738年のアルダスゲート経験以後、彼の聖餐論と聖餐経験に変化があったかどうかが問われねばな

らないということである。この問いに答えるために、筆者はウェスレーがその晩年に至るまで一貫して守り抜いた聖餐経験という事実に密着しながら論述して行きたい。

1740年（聖餐否定の「静寂主義者」と分離し、信仰覚醒運動が画期的に進展した年、37才）から一年間、及び1782年（79才）から没年の1791年までの日誌では、ウェスレーは実に五日に一度は聖餐受領に励んでいる事実が記録されている。⁽¹³⁾ ソサエティの人々にも各教区教会で聖餐を受領するようにと強く勧めたので、メソジストの主日の生活は次のようであった。早朝五時、ソサエティの集会（これは彼らの誇りでもあった）、その後、教区教会での朝拝、同じく夕拝、後、ガス燈の普及という助けもあってメソジストの集会所での夜の集会があるという具合であったらしい。遠路を急ぐメソジストの陪餐者と、多数の受領者を前にする司祭たちの困惑は、Churchの二巻から成る研究に詳しい。⁽¹⁴⁾ 1744年の「組会（Band Societies）の規則」には、毎主日の陪餐が定められており、1784年9月10日付でコーク（Thomas Coke）に托した北米のメソジストへの手紙にも、同様なことが勧められている。後述の「聖餐受領の開放」の蔭には、教会秩序と礼典尊重を乱す者への厳しい叱責があったし、成人の回心を説く活動のただ中で、自らの少年時代の経験をそのままに行うかの如く、9才の子供に陪餐を許したとも言われている。

一口に信仰覚醒運動と言っても、注目され、評価されているウォルシュ（J. D. Walsh）の研究⁽¹⁵⁾が指摘するような多様性が内蔵されているのである。ウォルシュは問う。何故、特に1735年頃から60年頃にかけて、多くの国教徒たちが同様の回心経験を味わったのであろうか。当時、広汎に亘っていたソサエティ運動との関連はどうであったのか。ウェスレーをその代表の一人とする、これら広汎で多様な運動への反響の大きさはどう評価すべきか。何がその底流にあったのか。ウォルシュの研究の良さは、研究の視野の広さであり、分析の綿密さと明晰さであろう。例えば、信徒による巡回伝道や野外説教などの先例は、ウェスレーやホイットフィールド

(Whitefield) による導入以前にウェールズでなされていたと彼の Evangelicals に対する重厚な研究の一端をのぞかせる。

筆者はウェスレーが新生、聖化、栄化へと連なる救いの信仰を高調し、聖書的、体験的キリスト教の真実性を身をもって立証した人物であると考えている。そしてアルダスゲート経験は、それとの関係で重要な位置を占めるとも理解している。けれども、この理解を欠く者に同調できないように、前述のウェスレーの聖餐経験の重要性を把握することなしに、従来の対立的、図式的理解を繰り返している者にも同調し難い。それは更に、彼の聖餐論の概観を経ながら解明に努めねばならぬことでもあろう。

(2) 「ウェスレーの聖餐論」概観⁽¹⁶⁾

本項は、ウェスレーの礼典観の基本的理解及び、聖餐観の各論の検討とに分けられ、先ず前者から考察される。

ウェスレーは単に礼典に限らず、他の一切を見るのに、四つの規準というか、チェック・ポイントというか、そう言ったものを備えていたようである。第一の最も根本的な規準は、申すまでもなく聖書であり、「一書の人」にして当然のことであろう。第二には理性、第三に経験、第四に古代教会の伝統、即ち、その教会実践の普遍的模範がある。⁽¹⁷⁾ そして実は、これら四つの規準こそ、岸田論文に指摘されているロード派高教会アルミニアニズム及びカロライン神学者の中で高調されていた規準にはかならなかったのである。

このような規準を経て成り立つ彼の礼典観は、それが聖書に立証されるような神の制定であり、恵みの手段である点、彼自身の生活や実際の活動の中で具体的に体験し、又、人々を指導して見て有効なものである点、更には国教会の伝統（祈禱書、39箇条、典礼、説教集など）を覚醒させ継承するものである点などを、その基本点としている。

彼は祈禱書のカテキズムから引用して、礼典を、「内的な恵みの、外的なしるし」と表現し、更に、北米メソジストのための Sunday Service にも39箇条中の第25条が、第16条として主要な改変なしに用いられて、同様

な表現を継承している。人はこれを「単なるしるし」としてはならない。旧約聖書の背景や福音書を書き変えない以上、礼典の神的起源は明確である。霊的に無知、無能である我らのために、神はこの「中心的な恵みの手段としての聖餐」を制定し、その受領を命じられる。ウェスレーは又、その体験と判断力で、聖餐の具体的感化を見てきた。勿論、しるしの偶像化と恵みとの同一視を恐れる彼は、こうも説いている。「この手段の中には何の力もないのである。それ自体は、とるにたりない、死んだ、空虚なものである。神から切り離されるなら、それは枯れた葉であり、影である。また、私がこれを使うことの中に、少しの功績もない。……しかし、神が命じられるから、私はするのである」。⁽¹⁸⁾ アクセントを強く一方に置くウェスレーの例の調子ではあるが、このような典型的なプロテスタントが、その聖餐尊重のゆえに生涯、法王派として中傷され攻撃されたことは皮肉でもあり、又、実はその微妙な一事にこそ、問題の核心が物語られているのである。

アウグスティヌス的表現ではあるが、「しるし」が結びつける「こと」がらそのもの」とは何か。「内的で霊的な恵み」とは何か。ウェスレーは再びカテキズムから、「罪への死と義への新生」⁽¹⁹⁾と答えている。「しるし」は「こと」がらそのものと同一視されないが、同時に、分離もされない。後代メソジストの誤解や混乱にも拘らず、ウェスレーは「しるし」をして、単なる象徴と見ることに激しく反対している。これ以上の考察は、後半の各論の検討に譲ろう。

サンダーズの分類に従うと、⁽²⁰⁾ ウェスレーの聖餐論は、以下の十項目（但し、「キリストの現在」は別項で論じる）に分けられている。以下にそれらを略述する。

(A) キリストの苦難と死の「記念」(Memorial)としての聖餐

近年の聖書学による考察やデイックス (Gregory Dix) の労作⁽²¹⁾ などによって、記念 (アナムネーシス) の意味が解明されつつある。ウェスレーは既にそれが単なる歴史的出来事の想起や受難の追憶より以上のものであることを看破していた。聖餐は受領者をして想起せしめるのではな

く、「今、ここで」キリストの贖罪の恵みのすべてに参与せしめるのである。そこでは、キリストの十字架が記念されるのではなく、十字架のキリストがキリスト者の礼拝の源泉と対象として仰がれるのである。それは同時に、我らのために死んで甦えりたもうた主との喜びの宴として「今、ここで」守られているのである。いずれにせよウェスレーの「記念」理解は、聖餐における贖罪者、復活の主との力動的出会いを示している。

(B) しるしとしての聖餐

ヘブル語 学徒としてのウェスレーは、主イエスの制定語の「……である」が、当時のユダヤ人にとって「……を意味する、……をしるしとする」と受けとられることを知っていた。では、パンとおどろ酒という物案は何のしるしなのか。勿論、キリストの体と血とのしるしである。それは我らの側の主観的心理的作用でなく、現実に真の受領者に多くの恵みを伝達する。伝達の具体的道筋は秘義に属するが、それは現実に具体的に生起する。受領者の「魂の食物」であり「生命のパン」である。

(C) 恵みの手段としての聖餐

彼は「恵みの手段」と題する説教の中で、次の二種類の人々と対立している。第一の人々は聖餐受領を功績化する人々である。第二の人々は、神が我らのために与えられた恵みの手段を軽視し無視する人々である。中心的な「恵みの手段」としての聖餐受領も、恵みそのものの代用として魔術化されたり、恵みと分離されたり対立させたりすることは許されない。よく言われるように、物案は代理のしるし (signa representiva)ではなく、そこに現存する実在の表示のしるし (signa exhibitiva) である。

ウェスレーは恵みの手段を、祈り、断食、告白、集会励行や愛の業、御言への黙想と聴従という多様性で理解した。初期メソジストの愛餐などはその好例であろう。だが古代教会やモラヴィア派、ピューリタンに学んだこれらの手段も、聖餐の中心的位置を動かすことはなかった。

(D) 聖餐と終末論

聖餐が「来るべき王国の晩餐の型」であること、そこで救いが完成され

る、御国の恵みの保証であることが力説された。ウェスレーが「聖徒主日」を尊重し、召されし兄弟たちとともに食卓にひざまずく自らを自覚したことは記憶されねばならぬ。そこは、天と地の出会うところであったからである。

(E) 聖徒の交わりとしての聖餐

前項と重複するが、彼は聖餐に戦鬪の教会と勝利の教会との交わりの食卓を見た。愛の交わりも奉仕活動も、ここにその源泉を持たないでは深化されず成育しない。

(F) 犠牲としての聖餐

この点には、ウェスレーに対する当時の高教会アルミニアンイズムの影響が強く出ている。永遠の大祭司であり、犠牲でありたもうキリストの自己奉献以外に犠牲はない。再び、聖餐はカルバリーの記念のみでなく、キリストの永遠の犠牲の記念でもある。我らがキリストを再び献げることなど出来よう筈もない。キリストは一度かぎり、然も永遠に、神の御前に自らを献げ、それを聖餐の中でくりかえして我らに示したもうのである。

(G) 自己奉献としての聖餐

キリストは教会を「私の体」として自己同一したもう。その肢としてのキリスト者は身体的に個的に、「キリストとともに」自己を奉献する礼拝者である。キリストなしには、一切は意味を失う。同時に、「キリストとともに」自らの体を奉献しない時、彼は又、その体の肢としての一切をも失う。ウェスレーが高調した、神の普遍的な愛と救い、信仰により恵みによる義化、聖書の聖性の追求が、この点でも力説されているのを見る。

(H) 聖餐受領者

受領者に求められているのは、「心をつくし力をつくして神の命令の目的に従う」ことであり、神の約束を信じて食卓に来ることである。聖餐受領のふさわしさとは、ただキリストのみを信じて受領することである。ウェスレーは聖餐の業が功績化することにも、受領者の側を強調することにも警戒を示した。⁽²²⁾

さて、筆者はここでウェスレーが聖餐を悔い改めに導く礼典 (converting ordinance) と確信していたことに触れておきたい。⁽²³⁾ このことは、彼が聖餐受領について極めて粗雑にしか考えていなかったのではないかと誤解されて、その真意が曲げて理解されることを恐れるからである。

ウェスレーによれば、信仰は我らのうちに神が創造される恵みの業であった。人の業ではない。従って人が信仰によって主の食卓に近づく時、誰が聖餐受領のふさわしさを判断して、あるいは勧め、あるいは押し止めることが出来ようか——と言うのである。

勿論、それが悔い改めに導く状況を数多く目撃したからと言って、ウェスレーがいわゆる求道者に陪餐を許した形跡はないし、我らが今日、求道者として出会う人々と、幼児洗礼という状況下にあった当時の求道者とを同一視してもならない。現実には、当時も外的な安全弁の一つとして「受領のための切符」のようなものが備えられたりした。⁽²⁴⁾

ただ抽象的理論だけが先行して、教会全体による、ましてや民衆による力動的な聖餐受領の具体的現実のない我らとしては、全く驚異の外はない。ウェスレーの目指した真意が理解されることを心から望む次第である。

(I) 聖餐の奉仕者

初期メソジストが、最後には「頑迷な父親」と喧かざるを得ない程ウェスレーは頑強に、メソジストたちの、伝道している者ならば誰でも聖餐を執行してもよいという考えに反対した。旧約の予言者の如く自由に伝道に挺身する彼らも、接手礼を経ずして祭司としての職務を犯してはならないとするのが、「聖務の職分について」という説教などにおける彼の考えであった。奇妙なことにこの基本点は、彼が古代教会における職制についての理解で意見を変え、又、北米、スコットランド、遂には国内伝道のための接手礼を自らの手で行なった後にも不変であったようである。ウェスレーの緊迫した特殊状況を一般論として論じる愚かを犯してはなるまい。

(3) 特に「キリストの現在」をめぐって

Sunday Service の第18条は、主要な変更を経ていない39箇条の第28条

である。「主の晩餐における全実体変化説、即ち、パンとぶどう酒の化体は、聖書によって証明され得ず、明白な御言と矛盾し、礼典の本質を棄て、多くの迷信に機会を与えるものである」。(25) ウェスレーは、この化体説を聖書と古代教会の伝統、ひいては我ら自身の理性的判断にも反するものとして斥けた。(26)

にも拘らず、彼は聖餐における「キリストの現臨在」を明確に信じていた。ヒルデブランド (F. Hildebrandt) の解釈にも拘らず、やはりウェスレーはこの点では彼の言うようなルター的解釈にではなく、むしろカルヴァンに近いのではあるまいか。彼はキリストの身体が天に臨在することを力説している。(27) その新約注解は、制定語の字義的解釈を斥けている。(28) 字義的解釈の結果は全実体変化説以外にないことを看破していたようである。

ボーゲンはウェスレーの「聖餐におけるキリストの現在」を理解するためには、母スザンナとの書簡交信が一つの鍵となると見ている。母が引用し、全く賛同しているある青年の表現とは、次のようなものであった。「ふさわしい受領者たちに、キリストの死の恩恵を、キリストの聖霊の働きによって分け与えるために、その時、キリストの神性が著しく臨在しておられる」。スザンナはこう続けている。「……一人一人の真の信徒に、あの偉大な贖罪の効力と功績とを向けるために、このように我らの主が神として臨在されているからには、聖別されたパンは確かに、キリストの身体のしるし以上のものです。なぜなら、キリストの臨在のおかげで、私たちはしるしばかりでなく、しるしが指し示している実在——キリストの受肉と苦難による恩恵のすべて——をしるしと共に受領するからです。しかし、この神によって建てられた制度がどのように他の人々に見えようとも、それは尚も私には神秘で一杯です」。(29) スザンナには、高教会 アルミアンとカロリング神学者の影響が実に濃厚である。しかもこの母からの手紙が1731～2年、2月21日付であり、ウェスレーの説教、“The Duty of Constant Communion” が1731～2年2月19日付となっている事実、しか

も前述の通り、五十数年後のウェスレーが尚も全くその説教の通りに考えていたのだとすれば、彼の基本線は実に明白であると言えよう。

ウェスレーはルター派の共在説と「属性の交流」に立たない。キリストはその神性によってのみ遍在されるからである。受肉者イエス・キリストの生涯と死とからくる恩恵が我らのものとなるためには、遍在の神としてキリストが立てられ給うことがあらねばならず、事実そうあるのだと信じた。彼は神性と人性の問題よりも、父・子・聖霊なる神の一体性により強い関心を示した。神は霊である。それ故にキリストが我らに現在される唯一の道は御霊としてであるとしながらも、三一の神の礼典的現在を語り、その神が受肉と十字架と復活の恵みのすべてを受領者に分ち与えられるとした。⁽³⁰⁾ 奇妙なことに、メソジストによる従来のウェスレーの聖餐論の理解は、彼をツヴィングリ的に理解していたことであるが、彼自身がこの立場を否定する言辭は枚挙の暇のない程に多いのである。⁽³¹⁾

要約すれば、ウェスレーは人々をして物案「のみ」に注目させるような場所的、物質的、身体的現在を拒否するが、同時に、多くの伝統を吸収し消化し再解釈し批判的に継承して行きながら、あくまでも神の御業として、又、それに受領者が参与する形での Dynamic Presence, Living Presence とでも表現できるものを確信していたと思われるのである。

IV 結 論

以上の、ウェスレーの聖餐論に関する概観を踏まえた上で、我々はその特色をどこに見出し得るであろうか。そしてそれは、今日のエキュメニカルな対話に対して、いかなる貢献を果すであろうか。以下に、三点を挙げて論述したい。

先ず第一に、彼の聖餐論と教会論との関連を取り上げよう。「メソジストは、教会論を持っているのか」と題する論文⁽³²⁾の中で、アウトラー(Albert C. Outler)は「小さな否」と「大きな然り」とをもってその間に答えている。彼は論じる。もしウェスレーや初期メソジストたちが教会論

を持っていなかったとしたら、それは至極、当然の理由によるのであった。即ち、彼らはソサエティの一員なのであって教会を形成してはおらず、又、教会を形成しようという意図さえ持っていなかった。ウェスレー自身、硬骨な国教会人としてその生涯を貫き、国教会への敬愛に燃えていた。「我らは非国教会徒ではない。分派主義者ではない。断じて分離しない」とは、ウェスレーの信念であった。彼及びメソジストの目指していたものは、対立的な新教派の樹立ではなく、母国を始め世界各地に聖書的ホーリネスを確立するという一事であった。このような願望が、ひいては国教会内での救いの福音の伝道と教会形成の前進及び靈性の覚醒に連なることを信じていたのであろうが――。

では、ウェスレーに教会論はあったのか。アウトラーは「大きな然り」で肯定する。その歴史的系譜は、ピューリタンや非国教徒からのものよりも、むしろジュール (John Jewel) やフッカーらから多くを継承していると解釈する。ウェスレーは以下のように信じていた。

(a) 教会の一致とは、聖霊によるキリスト者のコイノニア (参与) に基づく。

(b) 教会の聖性は、信仰義認の基点から出発して、聖化における成熟へとキリスト者生活を育成して行く恵みの訓練に根ざしている。

(c) 教会の公同性とは、すべての真実な信仰者の共同体によって、贖罪の御業が全地に及ぶことを指す。

(d) 教会の使徒性は、使徒的証言に忠実である人々の中での、使徒的教理の継承によって判定されるものである。

周知の通り、ウェスレーの信仰、神学、活動は温い理解を持って迎えられることが多くはなかった。法王派とか熱狂派とか攻撃され、又、暴徒に襲われたりもした。伝道活動や聖餐覚醒運動が、具体的に教会で阻まれている時の「世界は我が教区」なる語ほど興味深いものはない。ウェスレーには、一方において教会を教区を越えた世界教会として把えている見方がある。それも抽象的な神学論としてではなく、具体的な伝道の場、礼拝の

場として扱われた世界教会なのである。ラップ教授はメソディズムの「場」や「位置」という表現の代りに神による「創成」や「出現」という表現を、又、「信仰復興」や「信仰覚醒」の代りに「復活」を用いるべきではないかと提言する。⁽³³⁾ ウェスレーは一教派の始祖としては扱え難い存在ではないか。主イエス・キリストの死と復活の福音が伝えられるべき世界全体を「教区」として凝視している存在である。他方、彼は教区という具体的な場や枠組や伝統を決して無視しようとしな。そのような忠実な教区人にして世界教会人なる存在が、ウェスレーにおいて「創成」され、世界教会のスケールで復活の主の御業を進めたのである。

このような視座を外にして、Evangelical とか Sacramental なる枠や用語を用意しても、彼はこれらに十分に適合してくれないのではあるまいか。しかも、世界教会又は世界宣教と教区という二つの視座を一つにするものこそ、実は真に Evangelical であり Sacramental なものでもあるのではなかろうか。

第二点、一般的には、伝道とか信仰覚醒とか集団的回心などと言うと、教会論的展開や聖餐経験と無縁になってしまい易い。ウェスレーは重厚な教会論を持ち、伝統的な聖餐観に立ちつつ、民衆を教会訓練と聖餐経験に導いた。ここに初期メソジストが個人的敬虔に流れ去らなかつた秘密がある。彼らはウェスレーによって抽象的精神主義からも儀式的自己満足からも救われた。伝道は礼拝、聖餐その他、多様な恵みの手段と結び合わされつつ、自らを閉鎖することなく未だ福音を聞かない人々への止むことなき伝道として溢れ出たのである。

第一点及び第二点は、そのまま第三点に結びつく。即ち、彼の神学と体験との関連についてである。一体、神学的オリジナリティとは何か。独創的な神学的仮説を提出するための苦悶なのか。ではそれは具体的に言って、礼拝、聖餐、伝道といった生活とどこで関わり、ひいては救いを求める人々とどこで交わっているというのか。もしオリジナリティが、神によって創造された一人の人間として、神によって与えられた理性、意志、感

性を十分に働かせ、人間と世界を蝕む罪と障害から人々を救い出すために自らの歩みを築き続け、神の目的を成し遂げてその栄光を顕す根源的精神と関わっている⁽³⁴⁾とすれば、ウェスレーほどにオリジナルな人物も稀であろう。

本稿のために読んだウェスレーの聖餐論研究者の多くの文章が、聖餐論と聖餐経験とにおけるこのオリジナリティの現代的自己批判、又、メソジスト的、現代教會的な反省に基づいていることを知った。

同時に前稿から本稿に向うまでの一年間に、聖餐をめぐるいかに多くのエキュメニカルな対話が続けられているか、その成果がいかに多く報告されつつあるかも知った。⁽³⁵⁾

ウェスレー研究も全34巻から成る新しい彼の全集が、オックスフォード大学出版局から刊行される運びとなり、その第一巻目が世に出た。⁽³⁶⁾我が国においても野呂芳男のウェスレー研究の大冊が世に問われて、本格的なウェスレー研究の時代が到来した。⁽³⁷⁾この際、志を新にしてウェスレーをウェスレー自身に聴きつつ、同時に、ウェスレーが混迷深い今日の世界と教会に語り続けるのを聴き取りたいものである。

〔註〕

- (1) ウェスレーの聖餐論研究の資料としては、彼の説教、トラクト、書簡、日誌、新約注解、166篇から成る聖餐讚美歌がある。更に、39箇条の Sunday Service への移行の研究、ウェスレー兄弟の讚美歌集の序文として再録出版されたブレヴィントの The Christian Sacrament and Sacrifice も重要な資料であり、研究である。
- (2) J. E. Rattenbury, Wesley's Legacy to the World, London : Epworth Press, 1928, p. 174.
- (3) E. Gordon Rupp, "The Holy Communion in the Methodist Church," The Holy Communion, (ed. H. Martin), London : SCM Press Ltd., 1954, p. 117.
- (4) Frank Baker, John Wesley and the Church of England, London : Epworth Press, 1969, p. 84.
- (5) Horton Davies, Worship and Theology in England, Vol. III, New

- Jersey: Princeton Univ. Press, 1961 p.209.
- (6) Ole E. Borgen, John Wesley on the Sacraments, New York: Abingdon Press, 1972, p. 16.
- (7) A. Raymond George, "The Lord's Supper," The Doctrine of the Church, (ed. D. Kirkpatrick), New York: Abingdon Press, 1964, p. 140, 及び, "The Means of Grace," A History of the Methodist Church in Great Britain, Vol. I, (eds. R. Davies and G. Rupp), London: Epworth Press, 1965, p. 259.
- (8) Paul S. Sanders, "The Sacraments in Early American Methodism," Church History, Vol. 26, (1957), pp. 355—357, 及び "Wesley's Eucharistic Faith and Practice," Anglican Theological Review, Vol. 48, No. 2, April, (1966), pp. 157—158.
- (9) Paul S. Sanders, "Wesley's Eucharistic Faith and Practice," Anglican Theological Review, Vol. 48, No. 2, April, (1966), p. 157.
- (10) John R. Parris, John Wesley's Doctrine of the Sacraments, London: Epworth, 1963.
- (11) John C. Bowmer, The Sacrament of the Lord's Supper in Early Methodism, London: Dacre Press, 1951.
- (12) 岸田 紀「ジョン・ウェズリのアルミニアニズムの系譜」, 「名古屋大学文学部研究論集」, (1967), 「ジョン・ウェズリの高教会主義の一背景」, 同上, (1968), 「オックスフォード・メソジズムの起源」, 同上, (1968), 尚, 来春出版されるときくウェズリ研究が待たれる。
- (13) John C. Bowmer, *op. cit.*, pp. 49—61, T. H. Barratt, "The Place of the Lord's Supper in Early Methodism," London Quarterly, July, (1923), pp. 56—73.
- (14) L. F. Church, The Early Methodist People, London: Epworth Press, 1948, More About the Early Methodist People, London: Epworth Press, 1949.
- (15) J. D. Walsh, "Origins of the Evangelical Revival," Essays in Modern English Church History, (eds. G. V. Bennett and J. D. Walsh), London: A. and C. Black, 1966, "The Cambridge Methodists," Christian Spirituality, (ed. Peter Brooks), London: SCM Press Ltd., 1975.
- (16) 本項は, 特にボーゲン, ジョージ, サンダースの研究に負うところが多い。
- (17) Works, (ed. Jackson), VI, p. 260, X, pp. 134, 150, 193, Journals, VI, p. 54, Letters, III, p. 172など。
- (18) 『説教上』野呂芳男訳, 東京: ウェスレー著作集刊行会, 1961, 336頁。

- (19) Standard Sermons, II, pp. 237—238, cf. Letters, III, p. 357.
- (20) Paul S. Sanders, op. cit., pp. 162—174.
- (21) D. G. Dix, The Shape of the Liturgy, London: Dacre Press, 1945.
- (22) G. B. Timms は、ウェスレーを “dynamic receptionist” と呼ぶが、これは慎重な検討を要する。cf., G. B. Timms, “Dixit Cranmer,” Church Quarterly Review, CXLIII, (1947), pp. 217—234; CXLIV, (1947), pp. 33—51.
- (23) Journals, II, pp. 360 ff.
- (24) Minutes, (ed. 1862), I, p. 37.
- (25) Sunday Service, p. 312.
- (26) Works, IX, p. 278, X, p. 151.
- (27) Letters, VI, pp. 213—214.
- (28) N. T. Notes, Matt. 26 : 26, 28, Mk. 14 : 24, Lk. 22 : 19—20, I Cor. 11 : 24—25.
- (29) Wesleyan Methodist Magazine, Vol. 67, (3rd. Ser., Vol. 23), 1844, p. 818.
- (30) この点については、大陸の改革者たちを初めとして、クラムマー、ジュール、フッカー、アンドルーズ、ロード派高教会アルミニアンの「現臨観」との比較研究を、稿を改めて試みたい。
- (31) ツヴィングリも、彼を単に象徴説として片付けてしまうことが、最近の研究によって難しくなっていると言う。出村彰、「ツヴィングリ」、東京：日本基督教団出版局、1974、277頁参照。
- (32) Albert C. Outler, “Do Methodists have a Doctrine of the Church?,” The Doctrine of the Church, (ed. D. Kirkpatrick), New York: Abingdon Press, 1964, pp. 11—28.
- (33) E. Gordon Rupp, “Introductory Essay,” A History of the Methodist Church in Great Britain, Vol. I, (eds. R. Davies and G. Rupp), London: Epworth Press, 1965, pp. xiii—xvii.
- (34) 森 有正, 「土の器に」, 東京：日本基督教団出版局, 1976, 15頁参照。
- (35) 日本聖公会大阪教区, 山根貞夫司祭には, 「祈祷書」に関する多数の文献を貸していただき, 研究上の貴重な示唆を与えられた。感謝を表したい。最近, SPCK はアングリカン関係などの礼典, 典礼の研究書を盛んに出版しつつある。
- (36) The Works of John Wesley, Vol. 11, (ed. G. R. Cragg), London: Oxford Univ. Press, 1975.
- (37) 野呂芳男「ウェスレーの生涯と神学」, 東京：日本基督教団出版局, 1975年。